

## 新約聖書 マルコによる福音書 10章 35節—45節（新共同訳）

<sup>35</sup>ゼベダイの子ヤコブとヨハネが進み出て、イエスに言った。「先生、お願いすることをかなえていただきたいのですが。」<sup>36</sup>イエスが、「何をしてほしいのか」と言われると、<sup>37</sup>二人は言った。「栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください。」<sup>38</sup>イエスは言われた。「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない。このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼を受けることができるか。」<sup>39</sup>彼らが、「できます」と言うと、イエスは言われた。「確かに、あなたがたはわたしが飲む杯を飲み、わたしが受ける洗礼を受けることになる。<sup>40</sup>しかし、わたしの右や左にだれが座るかは、わたしの決めることではない。それは、定められた人々に許されるのだ。」<sup>41</sup>ほかの十人の者はこれを聞いて、ヤコブとヨハネのことで腹を立て始めた。<sup>42</sup>そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。<sup>43</sup>しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、<sup>44</sup>いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。<sup>45</sup>人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」

※第1朗読と第2朗読は末尾に掲載

## 説教「仕えるために」

「苦難にある時の友は真実の友」という外国の諺（ことわざ）があります。

順調な時、上手くいっている時、成功している時に、周囲の人が好意的であったり、協力的なのは自然なことです。

しかし、不運に見舞われた時や、落ち目になっている時はそうではありません。

人間には、厄介ごとに巻き込まれたくない、自分に不運の火の粉が飛んでくることを避けたいという自己防衛本能があります。

そういった生物的本能を越えて、苦難の中でこそ共にいて、助けてくれる友が真実の友だと言えるのでしょうか。

「苦難にある時の友は真実の友」とは、苦難の中にある時、逆境の中にいる時こそ、真実の友が誰であるかが分かるということです。

また、「真実の友」とは、付き合いの長さやそれまでの親密度は関係ありません。間柄としては何も親しくない相手や、これまで親しくなかった相手が、誰よりも「真実の友」となることがあるのです。

本日の福音書は、イエスの弟子であるゼベダイの子ヤコブとヨハネが進み出て、イエスに、自分たちのある願いを伝える場面から始まります。

ヤコブとヨハネは兄弟であり、ペトロと並んで最もイエスの近くにいた弟子でした。ヤコブとヨハネ本人にも、自分たちは弟子たちの中でもイエスに近い特別な存在だという自負があったかもしれません。

兄弟は、イエスにこのような願いを伝えました。

「栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください」(マルコ 10:37)。

二人は、イエスが栄光を受けた時に、自分たちに高い地位を与えてくれるように頼んでいるのです。最も名誉ある席は、主人や支配者の右の席であり、次いで左の席です。

彼らは、イエスの栄光とは、地上での王として君臨する地上的支配のように考えており、そのイエスの右と左に座ることを、地上的栄光にあずかることだと考えていました。

そんなヤコブとヨハネに、イエスはこう答えます。

「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない。このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼を受けることができるか」(マルコ 10:38)。

「わたしの飲む杯」とは、「苦難の杯」「受難の杯」を意味します。

「杯(さかずき)」は通常、救いと喜びの象徴です。ですが、日本語にも「苦杯をなめる」という表現があるように、苦しみの象徴にもなります。

イエスの問いに対して、ヤコブとヨハネは「できます」と答えたものの、この時の彼らには、イエスのその言葉がまだあまりピンときていなかったことでしょう。

イエスが栄光を受ける時に、自分たち二人がイエスの右と左に座りたいというヤコブとヨハネの願いに対して、イエスはこのようにも答えました。

「しかし、わたしの右や左にだれが座るかは、わたしの決めることではない。それは、定められた人々に許されるのだ」(マルコ 10:40)。

これは、右、左の栄光の座は神が備えられるということでしょう。

「それは、定められた人々に許される」というのは、「それは、神が決めること」という意味で、自分たちの意志によってなされるものではないということです。

他の十人の弟子たちは、自分たちを差し置いて、抜け駆けした要求をイエスにしたヤコブとヨハネに腹を立てます。彼らが腹を立てたのは、自分たちにも同じような願望があったからでしょう。人間にとって、「人よりも上に立ちたい、先になりたい」という欲求から解放されて自由になるのは、容易なことではありません。

そんな弟子たちに、イエスはこう言います。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振っている。しかし、あなたがたの間では、そうではない」(マルコ 10:42-43)。

イエスのこの言葉は、弟子たちが、この世での野心や名誉欲を手放さなければならぬことを示しています。

イエスはさらに続けて、「あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい」と語ります(マルコ 10:43-44)。

それは、神と人への奉仕の招きでした。イエスの受難の意味を知る者は、神と人に仕え奉仕する者となっていくのです。

本日の福音書の中で、インパクトのある言葉の一つは、「このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼を受けることができるか」(マルコ 10:38)だと思います。

自分の力では抗いえないような、運命の渦の中での強大な試練が目の前に立ちだかっている時、イエスのこの言葉は、私たちに大きな力を与えてくれるのではないのでしょうか。

今年もあと、2ヶ月ほどとなりました。

一日一日を、神への感謝と賛美のうちに歩いていきましょう。

お祈りします。

神様、私たちに今日という一日を与えてくださり、ありがとうございます。どんな苦難の中にいる時も、あなたが私たちの友であるように、私たちがいつも自分自身の真実の友であり、隣人の真実の友であることができますようにお導きください。御子 主イエス・キリストの御名によって、アーメン。

\*\*\*\*\* 説教ここまで \*\*\*\*\*

旧約聖書 イザヤ書 53章4節—12節（新共同訳）

<sup>4</sup> 彼が担ったのはわたしたちの病／彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに／わたしたちは思っていた／神の手にかかり、打たれたから／彼は苦しんでいるのだ、と。<sup>5</sup> 彼が刺し貫かれたのは／わたしたちの背きのためであり／彼が打ち砕かれたのは／わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって／わたしたちに平和が与えられ／彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。<sup>6</sup> わたしたちは羊の群れ／道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪をすべて／主は彼に負わせられた。<sup>7</sup> 苦役を課せられて、かがみ込み／彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように／毛を刈る者の前に物を言わない羊のように／彼は口を開かなかった。<sup>8</sup> 捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか／わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり／命ある者の地から断たれたことを。<sup>9</sup> 彼は不法を働かず／その口に偽りもなかったのに／その墓は神に逆らう者と共にされ／富める者と共に葬られた。<sup>10</sup> 病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望まれ／彼は自らを償いの献げ物とした。彼は、子孫が末永く続くのを見る。主の望まれることは／彼の手によって成し遂げられる。<sup>11</sup> 彼は自らの苦しみの実りを見／それを知って満足する。わたしの僕は、多くの人が正しい者とされるために／彼らの罪を自ら負った。<sup>12</sup> それゆえ、わたしは多くの人を彼の取り分とし／彼は戦利品としておびたしい人を受ける。彼が自らをなげうち、死んで／罪人のひとりに数えられたからだ。多くの人を過ちを担い／背いた者のために執り成しをしたのは／この人であった。

新約聖書 ヘブライ人への手紙 5章1節—10節（新共同訳）

<sup>1</sup> 大祭司はすべて人間の中から選ばれ、罪のための供え物やいけにえを献げるよう、人々のために神に仕える職に任命されています。<sup>2</sup> 大祭司は、自分自身も弱さを身にまとっているもので、無知な人、迷っている人を思いやることのできるのです。<sup>3</sup> また、その弱さのゆえに、民のためだけでなく、自分自身のためにも、罪の贖いのために供え物を献げねばなりません。<sup>4</sup> また、この光栄ある任務を、だれも自分で得るのではなく、アロンもそうであったように、神から召されて受けるのです。

<sup>5</sup> 同じようにキリストも、大祭司となる栄誉を御自分で得たのではなく、／「あなたはわたしの子、／わたしは今日、あなたを産んだ」と言われた方が、それをお与えになったのです。<sup>6</sup> また、神は他の個所で、／「あなたこそ永遠に、／メルキゼデクと同じような祭司である」と言われています。<sup>7</sup> キリストは、肉において生きておられたとき、激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、御自分を死から救う力のある方に、祈りと願いとをささげ、その畏れ敬う態度のゆえに聞き入れられました。<sup>8</sup> キリストは御子であるにもかかわらず、多くの苦しみによって従順を学ばれました。<sup>9</sup> そして、完全な者となられたので、御自分に従順であるすべての人々に対して、永遠の救いの源となり、<sup>10</sup> 神からメルキゼデクと同じような大祭司と呼ばれたのです。

教会讃美歌 172番「つくりぬしを」1,2,5節、357番「主なる神を」1,2,3節、375番「神の息よ」1,2,4節、502番「父の恵み」1節。